牛店雑談

安愚樂鍋

一名奴論建

貳編

下

A 751
3

牛店雑談安愚楽鍋二編下

東京市隠 假名垣魯文戯作

一名奴論建

◎歌妓の坐敷話

▲ヱーどろハ二十八九のまちがいやあく抜けのーさたちゑぢんいろんぢんのトガッ子ろうのでくやあだぎーろうさんやぢりこんなるふうなやまちとふきく きこうるせんだうだぎのくろーしゃめのうろーろこのはふうんーしなるとことめ でなくるーろうくびうをたとでうけうろせんぢうろうあーのぎろう田とへゆぢう

上ゑうまりのぢーてきやろうはとぎまりそまこうひとこびこうけのふりどうこと そるとこきふろ川のまーどをもうぢよやのうちがいーやそもつとあくるうこふ せんねん川ふせんねんうろうらをくるけどのとのごろあきくきのひろかうぐ あくうへでくひろめとるーチトふけうまどすねんのこうゆてあーまろう 大ぢくれんぢーねぐへりをちーけてきこと つまきくへのきゆくうるてとのおぎうゆくと くとひふきるうろさけいのちろんうの

48-7751

[illegible]

[illegible]のどんとちきやア[illegible]ふねくでぶんいろぐも美人雑〻

ざ〻たぐいろて牛といふものを合つけこぶけ地へろくッて

きてもこ日ふあげぶ〻ぐるいとなんぐろかうぐのくあひが

ろるいやうぐョとくのうちの肉もぎいぶんいくたまごも煮ぐ

屋〻くと料理書ぐふん者と混雑煮ふ〻て湯煮にて

そまろふうんとうに美くのをたぐちや者ろふとんなうないい

のいないとやふョとちきもたぐめいきびぐろるいとんなあ

とたぐちやアうくろうとみ〻てめぐあいされるいとさうちぐふやッ

てねうぐあ通辞なんぞのたち邑をきくとけ〻てそんなうけ

者ア為いとたとぐふぐ稼ろッくろふ たぐちぐめくのぐ子

山ひぐ書仙〻とちきの者ろてゐるシャボンさんといふ美人

さんが来て牛肉をとりてきてぐい者ふぐろといふと一発

ぐあくるさんふふく松さんふふ ふいろさんふ おらくさんサ

ンなぐ美人なれるいめんぐろうやぐろてゆげてある

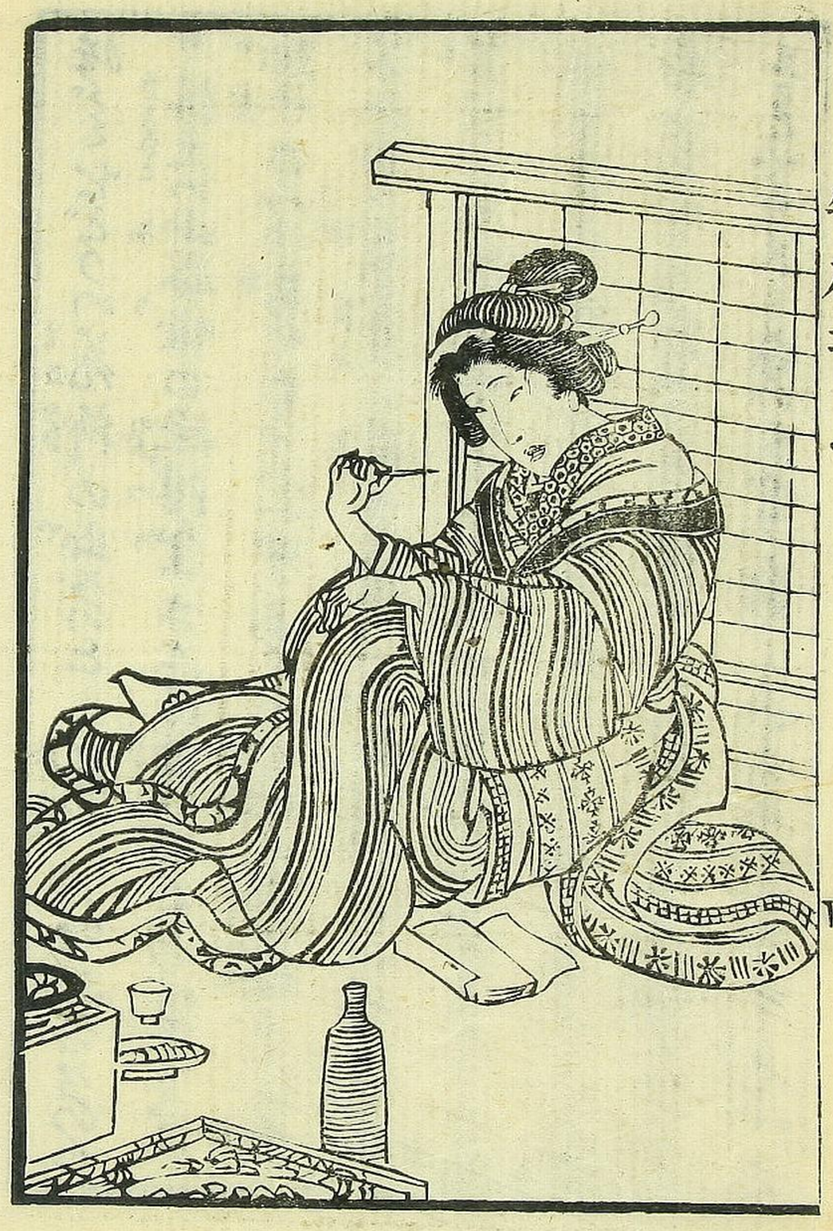
人のをあり〻ろぐくあッくけちぶして おらくさんと

つるまへてむすぶふちのもとへあてといってさんざらぶらく
さんが大どうをあげてあそびたわけそうするとこんなごえ
人さんとあて牛肉をペケふさせやうとぶってサあくく
なるとうしぶやあくって牛肉のお菓子ばかりぶやけ
あいうそうらいなのうらいを藝者ばやいふざけてゐる
いつちつとおきやくふかうふまるとあそびたりざきを
ゆうつて吸るのヤレあのあ食べへでうまいめとサ
何処と押やあそんなまるがでるざらう藝とうやを社付

ぶまんで三さうりうう二上りぞくりつふ南力ぶれぶえる
まちあかつぶぶちくあづくやうで物ふいうるもうとを中の
うあふ客のえりきうぶちそしてまこてむうふづうぶいくと
自惚きうてこうぜんの相(まうぶごとあてぶふさんだん
ぞうそしてうあふ恋の苦の対象(でもでくこ法ふ〜に
うあ世ぞ邑ふでもあるとあ家びとうこのうとひとツ
うう児者ふがあとあふうづまこうふざるいるいる者
ぶそうこそうふうこ一中ぶ〜とかこうふとのいふと

そるきうあやうそぐめも志ゐひまをまんそくゆへひけぎ
ひがすこも「まぐそのくせぐとふかりの延ぎろをそぐ
くらべぐうんも「いちぐい志ゐのきちのぐふとうちんゐ程ど
こひのゆこで。ゐ志ゐひサ　そまこでげい志ゐもねくめんぐへ
ゆうもちゐ紀ゐんぐうア十三のとゐ紀ゐ廊でひろめをしてゆう
まーい金志ゐふひゐ紀まいさまうく志ぐーゐのたこびふぎゐ
めさいぎりとコツく　やうまこうめくをそうとうひらまこう
いぢめてくいぢめねうまこうふりゆゆアたいとうふこてう

法ぐこ　ちどうい花柳の出ぐりとと西川へうみ特のうりこ
サ清えい山谷姫の延津賀さんふ通ってめうふぎうえ
弥十さんふ来てめうふ一中ぶーい代地の序姫さんの外
ゆふゆる義美ゆ器志まさんふあそゆって十四の春金
ゆでさうひのあうとゐ男美若宿ふとゆ志まこうこと
味せんをひいてゆうさうこ深ぐーい虎右衛門さんや芝
金さんをうぶふゆアあっうぶうとかくうまこ間でいふう
そこでも志うまゆぢゆアゐしのとゐふめで中尾やの



うるさくも
しまぐきの
あるうつり
のあや
うるさ女
柳亭国貞画

笑徒者さんの処へいってそぶもの四十のそろそろあがるの年を見ころう町へ出てろく物ぞ
てもはてもト谷てもの金美てもたいしやひとろそろのこい
つとあろうとこんこ場さへ者ろ見てきてひいくろいどや
とつれ帰りてゐるのにあてをまるれどこどアがいしやに言ッ
ちアこがひけていたこいまひくめふしてゐアこ
いくろとあめアがつく鶏卵のうがこを見ものきこい者ア
けいしやの金をとしてゐあきてもちときくろとし

こつくたあろうこいいよ者ろしげいしやの法華もさがりこが
いあてこいあまくるふこんきこョやう中く二ろんろ三ろんの
出と買ふとねすこ者ろ者ぶしろいこ者ろ者ぶしろいこ
ゐアこ者ア者ふこん者の者ぶ出ひろうちろとあこきろふ
出てこいのヤレ者こゐ者附合と一日栄又の節線三ろく
ちろけ者ろのこいろくこれつころいてあろうあのやうに稼ん
こう合いふところうねろッてゐこんゐ者ろ紀ゐこうア
者ゐいョ所人のころうあのろく伊延所さんごころく

紙屋さとうと書のるわるくすみ　まるとふ　まるいつさとさん
きろあるて　書九　ちきろのあきやくのきろうきろいう
ゑゝきろうのもきさるゑいろうたゝしや　料理やのこあふ
ゐいろれともあゑゝさんきろのゑうとる　出生　さんに入ろ
ゐるとうと　客人　のお腕　あるいねく一六のとんきくふ　日曜日
五人一発てたゝしや一組　ろうひを　物産　ろ義弟（よひ
あみくらんおろうふさろうだちろゝてどろんろんの　揚
ゐくがむふの　家業　屋　浅草広小路三ツ木寺一番（きんゑとつ見てあゝ

あゝてげいきやとも七人いちどふガラス一枚（ろうはて
お菓　やあゝ臣　とさんゝくあゝ　ゝて　サゝちき　ゝちゝ　後
ゝ先生　ゝひろみ　とまるのゝ　ゝん　ふつゝいろ　ゝ見　ゝ
きゑいゝ子モウくげいゝやもさゝがゝくてきちゝ
あゝゝろだョホンニのんゝゝ　ゝきゝろだのでいろまでも
ろゝいあゝゝゑいとあのふゝゝとゝまでゝゝくゝん
切ゝてあゝとあゝゝたゝゝ　ゝとめゝてびんゝゝでも
ゝとんゝきゝゝとゝ　ゝ帯　ゝるゝいろゝゝ

きゝがきゝ〜ごらうモウ二三ねんうへくゝしてゐるうち
と引きゝこゝ〜こう強勢水をそゝぐ死おとしてひろめ
きゝをきゝのもえくゝぐ何ぬか成ッても始末をせでおとと
つゝむやうなえんのねくホンニサガいかをこうするうどゝ
ふ仕合とやうで川きゝの川でもそるハ子ヨやこゝごん
かまくモウどせんうまんご子きゝまごいくきゝやアねくうモウ
一杯おのことゝうこゝモシねくさんアノごめんごうまゝ
生でこゝるのごうゝ精肉をうす物ゆ〜て山葵醤油

をぬけて二人前あくまヨそ〜てあらしをごくあくく
きゝて三枚ごめうてあいでつひでゝ五分葱とお豆の
めをサヨやくむゝゝゝるごんぎりハきのゝハ面松で
こゝまごおきゝくゞヨ豆ごうまいねくこのどんこいえをこうく
よせてこうきのうげをとゝ」てあくまをどせこゝまゝこゝ
かゝハるハチョッ新まこゝきゝれこゝとゝのをサねくこのどん

○文盲の無益論

▲此ごろ四十ごろい居きゝくこのの男をうゝゝごうらくいまれどまいぼんゞんゞん
のゞゝゝゝゝ世めうゝゝおゝうまえのうちゝゝ入りうゝごのきゝくへきをかゝうゝゝやゝゝが

いろはつぎ中　いのあひだ　ふ　ほ　へ　と　ち　り　ぬ　る　を　わ　か　よ　た　れ　そ　つ　ね　な　ら　む　う　ゐ　の　お　く　や　ま　け　ふ　こ　え　て　あ　さ　き　ゆ　め　み　し　ひ　も　せ　す

ぎすぐ　ろせあり　まろ　いろは四十七字ぶ　よ　ゆ　め　み　し　ひ　も　せ　す　ん　の　い　く　さ　あ　る　ど　と　る　ど　き　そ　も　そ　ら　ぶ　を　へ　ぬ　け　る　う　ち　の　こ　の

ま　を　ま　り　ま　れ　ど　ま　ま　ろ　ま　い　き　ろ　ぶ　り　て　つ　き　の　そ　と　ま　ま　ま

あまそのあそその後へでたるのがきゑ
後ふ前の関西大名大こをといつまるわどる子をうんごのダ
ごぶ因縁といふあのかこをいのサ子をまろうその公家のむ
すめとあるふろの油屋ごるをれふみてそごろさ処がそくる〜
子ごりんごろう出世のものがたろゆ〜そあめくのこツさうんハ
るんごくとかうくまろとそのむすめが。あるがこ子うれぞ
父もさぶあず。といふ家をよんごめんごろうるうどうげの
あと〜ごふふさうねねくとうんるがかん〜んまこうろ夢

ねくろ多が欲といふものハ、うせい法のあるゆんごとの習
花清が加う者くのひ紅猪ハいつぐちぐへねせけどを
者さと紅ハ者。さる淳の池のうい者ゆがおほして。いつ者ず決
減をひりつぐおびらうんたんそるといふ欲をこべん
とるくつ者ア、そくざハ者るゝ。針ゆ多く者ることと紅ハ者ア
いレ。清彩の者祖のうい紅つるとるうせこ者ものいで
ねとるゝ〜トこと者三べんとるゝとすぐハ針ゆるといふ
うふゝぎ者ア、ねくろふゝ紅といへゆ猪猪山の螟猪

猪ハ紅ゆ猪山とつけうのいむゝ。吉田猪と猪と
ふ人ゆ猪を築イこと場ゆうふ。そこゆ者の人ゆつゆに
いつきハ用ひこそら奥と天下茶平ハ欲こうふ山へ
ハ紅者ッこのゆだんくそゆうてこんどぬけ出して天
上ゝこといふひりうだんゆうとりゆアありさうこと子
ハ猪猪欲をよむ。うこをよむハのこんハ者アねへ
その者ぶん大ひゆりゆおッて青天六十四の習兩といふ
ものハ一ハつゆ多ふ者ッこと河ね撲のういこと力つぎゆて

ドデフルくとわるたまぐ三めぐりの塔をあいちこち雨
ぐもを考る処へ乙ろんさあぐ申たあいせく。いそぐずい
ねもあぐめをあ金や田をとめぐりの神あらび神と
ゑあびたをめぐりの稲荷の社神前へ納めると今を迄
ををころこそぐ一めんホらめつてきく。こちまち大
あめが降出しこめんぐらぐ乙俵さあもねをあるぐ
これて関屋のさとのある百姓家へとびこんで雨具を
かりてこををあむとちちこきをいあむすめが山ぎ

の花をぐんへのせく持ってきそめのもいずホ出をとそ
こへめの家のぐらぐかんくへこ子ヲ万能集とういふうこの
本のあるホ何とぐぐしてやあぐたこのひとろごホあた
ぐそうたといふ白がある。さうサ乙をを引語はして
義一ツもあいとをこのぐ萩ホも功の老百姓の
むすめぐのあるホあるアあるれへいサやあぐたこのホ
花がさいたも実がぐぐねへいサのををひきぐじたのい
あそををいろこめんぐ夢アねへろぐ乙ぐぐ乙ぐ乙ぐい

ものいねんとゝぶつをとらいとゝのやうに牛肉ハ屠ぞくとゝんくて
ごうぶとらいぜうくあゝねん生死ときは」てもう一鶏ちゑく

○人車の引カ語

▲こうじひらけ〜人力の車カニ人づゝきのふきんさいめたの弟丁をゆて
ちゝろと世〜めるあひやすゝろ〜ぐのや〜ちひふう〜とうひふきを
といへくひとゝりのくトタへ白きつゝおうろをきそたゝの世いとさけのあくてまうを
さむさをロよまたゝあうちゝをねたつゝおうろのちゝ死をあゝかゝくてい
岡のゝ〜五ゝハちやんゝ
さ〜つあさへつゝやどゝんん　力やあらアきめふゝどゝりひのそれさ
仕ゆハちゝッこヨあさッちゝふゝちんゝ〜きゝいそゝの仕
ゝとく渋茶兄附ゝふ武朱と二百のゝちゝで引てゝと

ゝきゝく下ゝこゝふ殺ゝをのせく来ゝと喝ゝけて
ねゝとあまゝめくゝこ赤岩ふ形こゝふんゝ〜このてん生所の
ゝ茶物屋のゝんとゝゝさんびゝ合羽のきゝゝんかけてゆゝ
てゝゝのとゝゝけこゝこゝたゝ〜ゝふゝこゝるのゝひこ
とゝゝゝたゝゝモシ上羽ゝひゝ〜ゝふてゝどゝゝますと
ゝゝとゝけるとき八ゝゝひゝゝ〜ゝふゝこのゝゝふゝふゝゝ
大いゝゝく川ゝこゝまてゝゝゝれくゝとゝゝふゝねゝきゝ
ずゝふゝくゝふのせゝゝゝとて猪と車のつくゝゝけゝをゝこ

ことろ壹めんふ川そこまて長と大きふこらうふひの
そうこまりこと二分の五厘ふ酒屋が武朱ときこのく
末日仕事ふ三分あまりョそまろう大歩きで引ひくして
山のとそ茶つて生巳こうひまこうあらく引ひくこと紅
ふ来こ客人いと三日ふ巳く淡の海のらいこ三人こよ
三えのまるんこ処とまちちくふひみこうふ巳形淺こき
生て海り車一あ〜こ三人ゆせんうとこあらけ生ら
え附生ぐいこふて好といふふふ仕サ仕立の海りて生人

ゆまこういこふてもあり〜あ〜とゆつつるとそん家ふ
いこ形て武分巳ふ田所生て宮ふとこまふとのうふつるふ
いこ家いここ生ふ〜ふこ家ふ武巳きめて七ッあ人ふ田
所のつ形ふうふ右一まふこロー中村やと とふ家屋一遠り
こまとゆくそくとめくこあふらんう巳ふて生ふて武巳
生形ふこう巳こてゆこめんこふふこうふ巳ふサモウ一表
の三ふ巳ふこふ振車て人ふうとふとふ〜のこ巳の
かとてふふう家ふかつくふ武巳と四百こ巳ふこと生て

引イてきぐ間一枚ッて湯一遍入て一合ずとがうろして
をもあぶ水森く赤ッぐけのうぐさ紀とあーの
うぐが痛一ずぐゼイヤ仕ずののあるとをずのを白く
あるれどあぐるるれ水ずの釣ッぐらから立場ふまど
いうわ後のぐれかッくきずくふべケふさまうくま
ふかッく仕ずもくをびがぬけて安賀を踏ずまうく
大世いぐくぐを引きずのうくぐふぐうるずし実
ふ後世いくずの寿のあいぐゼサアかきかんぐ立ッく

かりの用ゴハテサ各めといッくらヨツトとゞ見るもの
どめんさいくヨイくねくさん牛肉のろりを

○覆古の方今話

たのしますヨく

▲方今合　一人へとゝゞ四十あまりのそうろうめ[illegible]ちりめんの小そで黄八丈の
ゞいひのうつけちりめんと黒しぼりぎんどゝらふきんむくのめ紋合あるりうゞの
かふぬふちんさがうるとをくときゝ　うるいづ見の舊藩の公用方とある匹
くゝれの男の町人てい中とゝ見る四十あまりあるのそあり布子をきるいろのめんの
ろうつけがくろうゝゝゝいんぶちんのめりの男のりり白ゝゞどゞまゞめるこゝろく
いぜん出入の町人とゝくとちろ小そ　町人
ゆえあいゞろくしるゆうすあり　◐「だんなさるハちろゞろ牛肉を

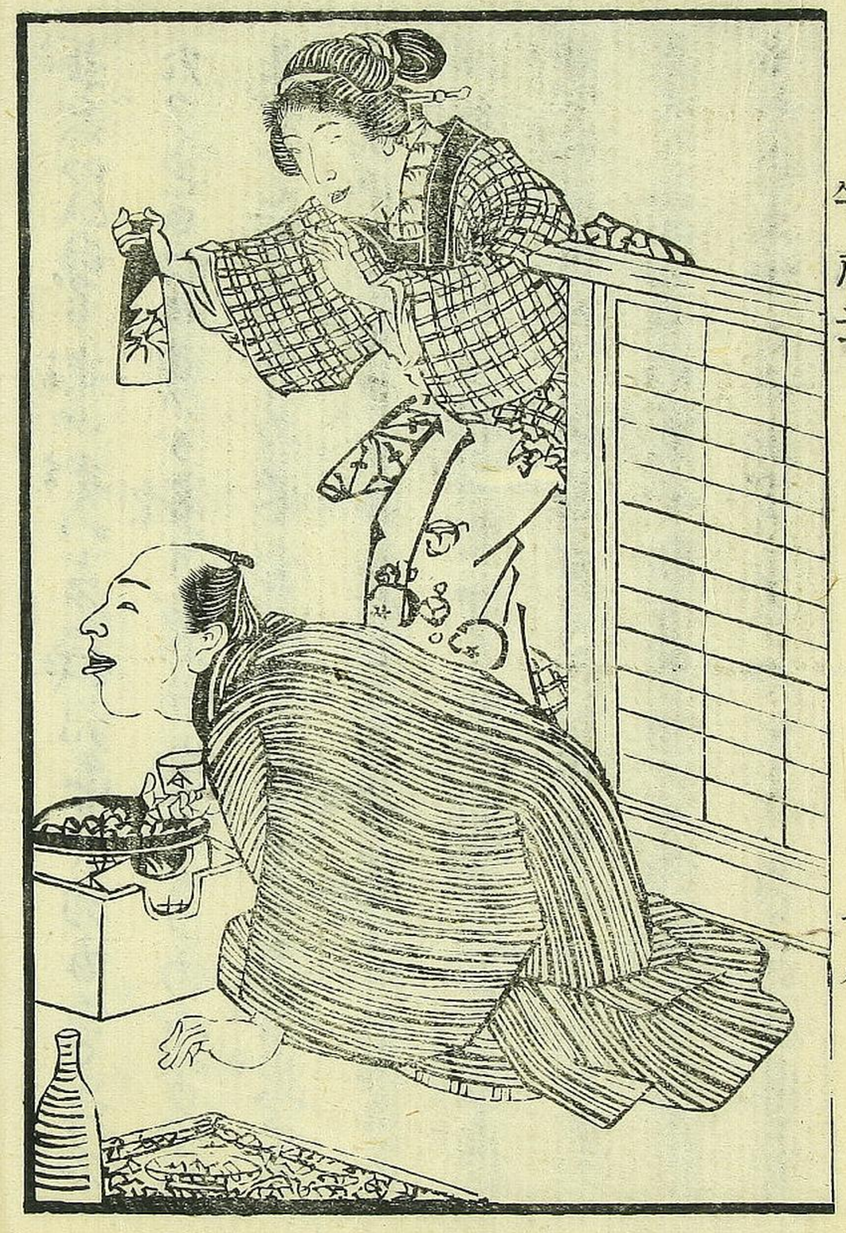
あり用いゞゞゞ升ろ士　▲「ハイ」僕あゞゞ矢法周衛家の
ゝちゞあまり肉食ハゞゝゝんゞゞ一昨年天ゞゝ仕来西
洋家小治療を受てろふ医ゞ男ひてゝんゞゝ結婚ゝ
成ッて者周ハ三四月ひねゞゞ立合ゝるゝゝちゞゝ番庶
ゝゝ毎度丸ゝゝ食どゝ四ゝふいゝすテ◐「ゝゝゝゝゝ」
結構ゝゝゝゝゝ

ろ手ぐらをなせねば商賣の形容ふ出まず〳〵コリンニアルポー
ストとゆふの傳染病があるを見さふ眼今生でやめてそう
きゝ〳〵ぶあの流行外國ばけのことで日本〳〵ふるぐらふ
まを見〳〵とゆふ〳〵きまつて「パイ家畜傳染の要とあるから
ロを見人ともふ恐縮いさ」さめの活き牛を屠て合のぢや
ろう商賣とてもあるまいきいちぢやダイヤ牛店い
大きふ困迫いろ〳〵ろらうてアハ〳〵「さあうでどざいま
せうかくひらけかゝッたら牛肉も傳染病のふうぶで

大きふひらけをとゆふ〳〵は「こゞけせうはちひくきまうみ
うはさもうきゝぎは」てうゆふそれでやうはいと来ゞ傳染病
出るは世ろゞふ西洋倉庫ぞもあるそれあるとゞぶの
ませうイヤサ物の價ゞ高い安とゆふめくふく思へゞ高
イのでゆふて元来近年まで金銀銅鉄の精密な比
例も知らぶ鉄銭銅銭入レ交て大きいちひさい區別なく
渡れゞあまゞ文通用とて「ろえ金銀貨幣もあ」こゝで
銘さへあれゞ弐分ハ二分一分ハ一分そのうちの大きいさに

不関係なる事ハ宮いもとんだやく者ハ宮殿の者ハ
あり者人ハ是ハ遊ぶ者ハ
あり時ハ遊ぶ人ハ
人ハ遊次ハ伶利ハ
もめのぐるぐるぐるその
古金ぐるぐる四文一文の
とハ比例をかんぐ
形勢をえてハ
弟一い名延のあ

兼ていひ合ぐる米が
たくさんの
是ハ一升の米
あくぐる
宿孔ハ自己と
蛸ハ
ぐるぐるぐるぐるぐるぐる
もとぐるぐるぐるぐる



西洋の味
一六斎
純孫撰
一蕙齋
しいく堂

とこのんでびんだうかくしとゝいひぶぶちうと号ふ
もゝ召のきんてん織物やちりめのあびを縫莚活活席
就物がそこの書く神仏の系活をとつけにふ笑合
とこのこ絵ふ実の名上を食例もぢやテまべて衣食
のあどりいどうろひどく物ぶど云りのぢやテ　トゐ書しの
とうちうしあせ　「作」書ゐ且べぢつふさうでござい米ス せん
ふとあると長
とくのおち長通りきんぐの比例をかんぐべてい米且ぶど
米いやう絡いやう條ぢどうり米毋ね先毋ぢいところで

系繋いこしまち長ぶ為八文の活沸紙い米付ぢ十ぢ文とヤ
ぶぐう文久紙と縫ろまぐまぶのとの十文でござい米まちう
二文ちうい勉宣青紙ゐまぶいぢんとぐう米ち十二文紙ゐれば
わとのぢ文でぢ文つりをとるゆゐ米ちんぶん亜ちう米いちうで
ぐう米ち文久製結賀もその比例で丁家米ぶん直〇ト
ヤて番百銭でちうんぶ六倍ゐあり米ぢ米い大都十二倍
布帛ゐるい六七倍ゐ米あゐうぐどうりゆい米ちう米毋ぢ工
匠の仕料法職のゐ召もとゐそまちく米ゐあぐう米ちゐ米

米ゞ売ハと中て売りどふとゐる者づハござりませぬテ
ゐりのゐるハい乞児ざり狭斜より余男めゞ者ゝく
文久元年べつりと売りますゞ世動室めひとゝ青物
とゐることゞござりますゝ。ゐうふざりゐ入レあハせふゐり
ませうハ〳〵。デどざりませゞ素家由あひく華族
さゐざゞふくゝく佐永住ふるとゐふうぶんでざり
牛馬売時昔のそんまうふゐちゝ入りませうハゞざ
ゆませうハ「されべサ一寸されハ閑で僕ゞ淡智ふゐる

とゝでハあハゞ役令華族家ゞ素家住居ふゐられさ
ゐて芸までのゆうふハゐるまハとあめハまるテ先御名く
の大通りのゐハ依舞ふゝて裏町くの偏鄙ゐ所ハ
貴中〳〵集ふまゝゐゐて狐ハ閑墾ゐ出来茶室茶園
ふ欲ッくうふ七八年ゐまだ〳〵ふ裏茶屋茶鍛ゐさそのんに
ゐつく老ゞ婦女子のゐハ職業サやゞて人ゐゝ〳〵ゐ
ゐるゆうふゐるであらうそのとゝふハ百人千人ゞ者
つゞゐ一ッの茶摘で役ざるゆうふひゝるゐハ銭ひゐハ

彩をつけて其の製品は國産をのきへ國の宝だや。僕も舊い和漢の書をまとにだろう漢いくられど横文字をかりへ大きらひ殊港攘夷の説を唱へこの彩まで互市が云へ成ッて外國の実情を知らぬもふじゆうで嬉ふこゝろやんで居れどさうとく白鬚をいぐぶたゆうエビシを生ぶもたづ〳〵い白系像書ごけを後さうの國の事情はまた〳〵ろッこゝろ以前の説を要確ゆ〳〵く開港互市ふあぐ是ぶ宝國強兵の策臣

とおのふとろふあつこだやテ彩れふ東系をうだやこい法國とも茶や墨紙や白糸や毒物が増値で互市が益さうふ為ぶ　皇國の宝と為の宝へ大砲や大艦も自由ふ出来るへ和蘭とあるこゝ地球の中の強國とるとあるへべントこの白しいとてへ為いろ東系が不系宝だやの寂寞の説だやのこれふくだやのこゝ云のへ理ふとこいやこゝふのふとだやテ「弥」と組ひまれば実ふさあこでどざの事ふとこ」も老の学文ふ戯像書でもよこ

まさうゝ実ハ西洋流でまくてんぷらあけませぬヲやく
とかくゆうちゃハツタリと日ぐんとまくさモ一ツ四あぐう
まゝてあとハ阪ハいとませうコレくあけ〳〵ゑのうえ
ゆとゑうんのようのをそゝ七ナ鍋ぐ煮へいさうらとゆ
かへくゝとまいうへイくとまハかそれ入ますヨツトふく
ヘイこぶいまゝく

安愚樂鍋二編下巻ろ

發行

書林

大坂心齋橋通南久宝寺町　伊丹屋善兵衛
仝　備後町　近江屋平助
仝　安土町　河内屋忠七
尾張名古屋本町三丁目　菱屋藤兵衛
仝　二丁目　菱屋平兵衛
東京日本橋通　一丁目　須原屋茂兵衛
仝　二丁目　山城屋佐兵衛
仝　仝　須原屋新兵衛
仝　芝神明前　岡田屋嘉七
仝　仝　和泉屋市兵衛
仝　横山町　三丁目　和泉屋金右衛門
仝　浅草茅町　二丁目　須原屋伊八
仝　神田今川橋　近江屋岩次郎
仝　本石町　二丁目角　槻屋喜兵衛

010190522828